序章

モンゴル諸族文字・言語問題会議

Конференция монгольской группы народов по вопросам письменности и языка. Москва, 10–17 января 1931 г.

モンゴル諸族文字・言語問題会議の参加者たち(於モスクワ　1931 年 1 月 10－17 日)

序章　　モンゴル諸族文字・言語学会議

12 世紀、突如として大帝国を築いたモンゴル人たちは、騎馬民族として自慢の機動力を生かし、様々なところへ移り住み、時によってはそこに首領を中心とした国をかまえた。移り住んだ場所に次第に同化されていったものも多くいたが、中には内部抗争を繰り返しながらも、モンゴル人としてのアイデンティティを保ち、かつてのチンギス・ハーンの栄光を記憶する人々もいた。

本研究での考察対象となるモンゴル人民共和国に住むモンゴル人、ロシア連邦に住むカルムイク人やブリヤート人などは、かつての記憶を留めるモンゴル系の言語を話す人々である。

モンゴル人民共和国は、南北と中華人民共和国とロシア連邦に挟まれ、アジアのほぼ中央に位置する。人口は現在およそ 270 万人、その内、中心支族であるハルハは人口の 70%以上を占める。他に、ブリヤート、ドゥルベト、トルゴート、ザハチン、ウリヤンハイ、ウウルドなどといった支族もおり、最西のバヤンウルギー県にはカザフ人も住んでいる。

ブリヤート人の住む地域は、そのモンゴル人民共和国の北で国境を接する地域にあり、中心となるブリヤート共和国（ロシア連邦構成共和国）はバイカル湖を東岸に存在する。ロシアではその他、チタ州のアガ民族管区、イルクーツク州のウスチ・オルダ民族管区といったブリヤート人たちの自治が行われている領域がある。人口はロシア全体で 2002 年およそ 42 万人である。また、その他にもモンゴル人民共和国（３万 5000）と、中華人民共和国（１万人）にも居住している。

カルムイクは、これらの地域と遠く離れたカスピ海の西岸、ヴォルガ河南岸にあるカルムイク共和国（ロシア連邦構成共和国）に多くの人が居住している。人口は 2002 年、ロシア全体でおよそ 15 万人である。カルムイクを構成する支族にはトルゴート、ドゥルベト、ブザウなどがおり、この地域に来てからあたらしく形成されたブザウを除くと、モンゴル人民共和国にも、中華人民共和国の新疆にも同じ支族の人々が住んでいる。

なお、モンゴル人とよばれる人々は中華人民共和国にも 500 万人ほど居住しているが、1920－1940 年のソ連邦政府の言語政策に同起する形で起こったモンゴル系民族の運動との連関性が薄いと判断したため、今回の考察の対象からは外した。

モンゴル、カルムイク、ブリヤートは、現在では、別々の言語を話す別々の民族とみなされている。しかし 1931 年には彼らが一堂に会して、言語の統一について話し合う機会があった。

モンゴル諸族の言語・文字問題会議である。

この会議は、モスクワで 1931 年１月 10－17 日に開かれた。主催者は新アルファベット全連邦執行委員会と民族・植民地問題研究学術研究協会である。会議には、ブリヤート・モンゴル自治共和国、カルムイク自治州、そして、モンゴル人民共和国、ソヴィエト連邦中央執行委員会民族協議会代表、共産党文化啓蒙部、民族・植民地問題研究学術協会、新

アルファベット全連邦執行委員会、ロシア連邦新アルファベット中央委員会、中央アジア研究協会から代表が参加した。また、モンゴル研究者として名高いアカデミー会員ウラジーミルツォフとポッペ教授が個人的に招かれた。

この写真の第二列目右から２番目で眼鏡をかけて座っているのはウラジーミルツォフ、46 歳。当時レニングラード大学の教授でアカデミー会員であった人物である。1929 年には『モンゴル文語・ハルハ方言比較文法』を出版し、学者として脂が乗り切った時期にあった。その右に座る耳が印象的な顔の人物は、おそらくニコラス・ポッペであろう。ポッペはウラジーミルツォフの弟子に当たる。32 歳にしてすでにレニングラード大学の教授の職にあった。ドイツに亡命し、アメリカに再び逃れてから書かれたポッペの回想録には 80 才を越えた彼の顔写真が載せられているが、彼の耳は依然として特徴的である。その左に座るひげを生やした人物は、バザル・バラーディンである。ブリヤート人の知識人で、1910 年革命前すでにブリヤート語のラテン文字表記を発表し、1930 年代に始まるラテン文字化運動にも積極的に参加していた。当時、彼は 52 才であった。最前列に少し横を向きながら座って納まっているのは、バタ・バッドマエフ。カルムイクの若き言語学者であり、ラテン文字化運動において指導者的な役割を果たしたとされる。彼は当時 25 才だった。

この写真に納まった人々が誰なのかを、カルムイク、ブリヤート、モンゴル、モスクワ、ペテルブルグにおいて聞いて回ったが、識別できたのはこれらの４人の、どちらかというと特徴のはっきりとした姿をした人物たちだけであった。モンゴルからの参加者や、カルムイクの言語政策において活躍したカルムイク人言語学者ノミンハーノフがどれであるかは判別できなかったが、幸いにもモンゴルの諸言語の言語政策に大きな役割を果たした４人の人物を特定することができた。彼らが一同に会し、会議を開くのは、これが最初で最後である。その意味において、この会議はモンゴル史の研究にとって意義深い会議となった。会議の目的が、三地域のアルファベットや、正書法、語彙作成の完全なる統一であったとはいえないが、少なくとも原則の統一をめざそうとするための会議であったことは明らかであるからである。

この会議でなされた発表は以下の通りである。

アリエフ	「ソヴィエト連邦の東方諸民族のラテン文字化と文字の統一について」
ハバエフ	「ブリヤート＝モンゴル自治共和国における文字のラテン文字化並びにモンゴル諸民族のアルファベットの統一について」
ドゥガルジャブ	「モンゴル人民共和国におけるラテン文字化について」
バドマエフ	「カルムイク自治州におけるラテン文字化と統一化について」
ダニロフ	「文章語と方言」
バラーディン	「新モンゴル文語の形成」
イリーシキン	「カルムイクの文章語について」
ヤコブレフ	「正書法構築の原則について」
バラーディン、ポッペ	「モンゴル語の新文章語の正書法について」

ノミンハーノフ	「カルムイク語の新文章語の正書法について」
ヤコブレフ	「民族語における術語創製の原則について」
リンチノ、リンチネ	「モンゴル語の術語について」
マンジエフ	「カルムイク語の術語について」
ハジエフ	「ソヴィエト中央出版局の活動について」
トグミトフ	「ブリヤート＝モンゴル国立出版局の活動について」
ドガルジャブ	「モンゴル人民共和国における出版事業について」
テレジニコフ	「中央アジア研究協会の活動について」

この会議にてモンゴル諸語の統一アルファベットとして27文字からなるアルファベット(a,b,c,d,ç,e,f,g,h,I,j,k,l,m,n,o,o,p,r,s,ş ,t,u,v,y,z,z,)とカルムイク語のための補足的な文字(ə ,ı ,x)三文字が承認された。また、会議に参加しているカルムイク人たちに他の二つの言語と違う表記があるところの修正を要請した。

また、標準語としてはブリヤート＝モンゴルとモンゴルにおいてはハルハ＝モンゴル方言、カルムイクにおいてはトルゴート方言を基準とすることを採択した。但し、他の方言、今までの文章語の遺産や、国際的な言語の財産も考慮しなければならない旨が記されている。

また、第二音節以降の弱化母音をどう書くかに関しては、バラーディンとポッペの両案からポッペ案を採択し、第二音節以降を母音調和に従って書くことを決めた。この点に関して、カルムイク語の正書法の整備は不充分であるとし、ブリヤート＝モンゴルならびにモンゴルの正書法と可能な限り統一する方向でさらに調整することを要請した。

また術語に関しては外来語を導入した場合、例えば母音調和など、その言語の音韻法則に従って書くことを決めた。

また、出版に関しては、モスクワの中央出版局にモンゴル部を作ること、ブリヤート＝モンゴルとモンゴル人民共和国との間で出版活動の調整をすること、ブリヤート＝モンゴル自治共和国とカルムイク自治州に印刷機械などを再導入することが提案された。

また、最終セッションでモスクワにモンゴル諸民族の言語と文字の発展を促進する常設委員会を設置することを決めた。（委員長クリベシェロフ、副委員長アマガエフ、書記ジャンビノフ）

後に各章で詳しく検討するが、会議全体を見ていて、特に注目すべきなのは、ブリヤートとモンゴルの見解がほぼ一致したものであったのに対して、カルムイクの見解は違ったものであったということである。この見解の違いは準備不足ということばで非難され、修正あるいは再調整を要請されている。これはブリヤートとモンゴルが隣接しているのに対し、カルムイクが遠く離れた地にあることだけに起因するものだったのだろうか？

1920年代から30年代にかけて、社会主義体制にあったソヴィエト連邦、モンゴル人民共和国、トゥバ人民共和国などでは言語のラテン文字化政策が行われた。カフカスのテュル

ク系民族アゼルバイジャンで始め起こり、その後、ソヴィエト連邦に瞬く間に広まり、様々な民族の言語のラテン文字表記が試みられた。

ソヴィエト連邦全域での言語政策としてのラテン文字化に関する研究は多く存在し、特にソヴィエト領内のテュルク系諸語のラテン文字化に関しては、それをひとまとまりとする研究も存在する。が、モンゴル諸語を全体として捕らえ、ラテン文字改革を含んだ言語政策史の詳細な研究は未だ存在しない。

今回モンゴル、ブリヤート、カルムイクの三地域を一つのまとまりとして研究する根拠は以上に挙げた会議の存在である。しかし、興味深いのは、この会議で統一する方向にあった三地域の言語表記は現在に至ると三つの別々の原則を持ってしまったことである。また、三地域で話されることばは、モンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語という独立した言語となり、ある言語で書かれたものが他地域においては理解しづらいものになってしまっている。

会議における意見の一致はあるいは相異は、この会議に至るまでのどのような背景によるものなのだろうか、また、会議の後、これらのモンゴル諸語はどのような運命をたどり、それぞれが独立した言語を形成することになったのだろうか、本研究の目的はこのような問題設定からモンゴル国、そして現在のロシア連邦、旧ソ連に住むモンゴル系少数民族の住むブリヤートとカルムイクにおいて 1920 年代から 40 年代初めまでに試みられたラテン文字化、キリル文字化を中心とした言語政策の過程と三地域の相互関連性を探り、モンゴル諸族の言語の統合、あるいは分離に関する考察をするものである。

先行研究

言語政策全般を扱った先行研究としてはアルパートフの『150 の言語と言語政策（1917-2000）』[Алпатов(2000)]がまず挙げられる。後に挙げるイサエフの『ソヴィエトにおける言語建設』と違い個別の言語に行われた政策に関してはさほど詳しくはないが、中央で中心的にラテン文字化政策をおしすすめたポリヴァーノフ、ヤコブレフなどの言語学者の活動に関しては一章を設けるなど、政策全体を見渡せるものになっている。

1920 年代から 1930 年代のソヴィエト全体の言語建設、特に文字の問題をあつかったものにはイサエフ氏の『ソヴィエトにおける言語建設』[Исаев(1974)]がある。この著作ではソヴィエト全体でおこなわれた文字のない民族に文字を作る運動から、ラテン文字化運動、キリル文字化運動までの道筋が、様々な系統の言語の個別的な事例の詳細な検討を中心にまとめられている。系統として取り上げられているのは、アゼルバイジャンや他のテュルク系の諸言語、イラン系の言語、カフカス系の言語、そしてブリヤートやモンゴル、シベリア北方の諸民族である。

しかし、アゼルバイジャンで何故、ラテン文字化が最初に起こったのか、特に、革命前にアゼルバイジャン語のラテン文字化を行おうとしたアフンドフはどうして、ラテン文字と接触のないように見えるこの地域でラテン文字化を思い立ったのかという問題や、アラ

ビア、トルコのラテン文字化運動との関係などには、社会主義のイデオロギー的な拘束があったからか触れられていない。

また、ロシア語のラテン文字化に関しては小さく申し訳程度に載っているが、ウクライナ語や、白ロシア語に関しては全く言及がなく、アルメニア語、グルジア語に関しても、ラテン文字化の議論がなされたのか、なされなかったのかの言及がない。しかし、そのような問題はあるにせよ、ソヴィエト期におこなわれた言語建設、言語政策全体像をつかむための基本となる一冊である。

同じイサエフの『ソヴィエト連邦民族言語の社会言語学的な諸問題』[Исаев(1982)]でも、文字の問題が扱われている箇所がある。ここでいわれていることは全作とほぼ一緒であるが、ラテン文字からキリル文字への移行のプロセスがより詳しく解明されている。しかし、前作に関して提示した疑問には答えられていない。

1923-1939 年までの間の民族政策を扱ったテリー・マーチンの『アファーマティブ・アクションの帝国』[Martin (2001)] には、言語政策に関する記述が様々なところに存在する。特に土着化に密接に結びついたウクライナ語化政策に関して考察した第三章や、ラテン文字化の象徴的な意味に関して検討された第五章、民族政策の基盤を非ロシア民族寄りからロシア寄りへ転換するプロセスとキリル文字化への転換の相関関係について言及されている第十章などは、非常に示唆に富んでおり、この論文の第一章において、ブリヤートや、カルムイクにおいて散見される現象を全体的なコンテキストに位置づけるときに非常に参考になった。

人口五万人以下の少数民族における文字創製の問題に関してはカザケーヴィッチの「ロシア少数諸民族の言語」[Казакевич (1996)]の中で扱われている。この論文は、人口が五万人以下の民族の言語の権利を保護する法律を作ることを訴えた論文である。1930 年代に、人口が五万人以下の民族にラテン文字化政策が広く展開されていた事実は、ソヴィエト政府がどれだけ力を入れていたかを物語るものである。しかし、文字を与えられた民族の中には、ラテン文字を廃止した後、キリル文字を与えられなかった民族が存在したこと、1989 年以降再度文字を持ち始めた言語も存在するという事実をこの論文は教えてくれる。

コムリーの『ソヴィエト連邦の諸言語』[Comrie (1981)]ではその題名の通り様々な言語に関する情報を提供してくれる。この本でのラテン文字の評価はソヴィエト内の大部分の民族（ロシア、ウクライナ、ベラルシア）がキリル文字を使っているのになぜ、「この時期にラテン文字を使うのかといえば、特に伝統的にイスラム教徒である人達に、宗教的な指標でありかつ伝統的な文字との取り替えが、言語的な文化的なそして宗教的なロシア化であるという印象を除くためだ」と述べてにとどまっている。つまり彼は、ラテン文字は諸民族に押しつけられたと見なしているのである。

日本語の本で見つかる本としてはボグダン・ナハイロ、ヴィクトル・スヴォボタの『ソ連邦民族言語問題の全史』［ナハイロ、スヴォボタ（1992)］がある。700 頁以上にもおよぶこの大作の中には、文字政策に関するつっこんだ議論はないが、ソヴィエト時代の全体的な民族・言語政策がほぼ網羅され、全体像が把握するのに役立った。しかし、ラテン文字に関しては「(ラテン文字を基礎としたアルファベットが共和国や州に再分割された各々の

民族語ごとに導入されたのは）民族のアイデンティティと言語を統合する手段であったが、汎イスラム感情に対する対抗措置であった」（122 頁）と述べられているだけである。

同様にダンコースの『崩壊したソ連帝国』［ダンコース（1990）］はソヴィエトの民族政策を見る上で重要な本であると思われる。この本には人口動態、宗教の観点からのソヴィエト領内の民族政策と同時に言語に関しての言及もある。しかし、ラテン文字化に関しては言及もないし、キリル文字化に関しては「・・キリル文字化のおかげで・・（二言語併用を促進する）言語間の接触干渉に対する重大な障害が除去された」（295 頁）と述べられただけである。

フロリアン・クルマスの『言語と国家』［クルマス（1987）］は言語政策としてインド、中国と並べてソヴィエト連邦の文字政策を「文字化と識字運動」という項で特別に取り上げて載せている。しかし、題字でおわかりの通り、基本的に識字問題あるいは教育の問題としてみているので、その文字を変えた政治的な意義に関しては、他の研究者の意見を並べた上で自分の意見を保留している。

テュルク系の民族の文字改革を取り上げて研究した文献はかなり多く存在する。M.G.スミスの『ソヴィエト連邦の形成における言語と権力（1917-1953）』[Simth(1998)]は表題に載った 1917 年から 1953 年までの言語政策に関しての研究である。非ロシア人に対する民族政策と同時に、言語学の理論上の議論やロシア語に関する政策への検討も加えられている。第六章のラテン文字化に関する議論では、モスクワの公文書資料の他、バクーやカザンというラテン文字化を推進した人々の中心と、アラビア文字を改良して使おうと主張した人々の中心となる二つの都市の公文書館資料を使い、議論の展開が詳しく立体的に論述されていて、非常に参考になった。ウィナーの「ソヴィエト中央アジアのテュルク系民族におけるアルファベット改革の諸問題（1920-41）」[Winner(1952)]はテュルク系の民族のラテン文字化、キリル文字化の意義について述べたもので、その背後に政治的な意図があったという結論では筆者も同意見である。

さて、日本語の文献に目を転ずるならば、森岡修二の『多民族国家における言語政策―ソ連邦における二語併用への道』［森岡修二（1974）］も注目すべき本である。この本ではロシアにおけるバイリンガル成立の過程で、帝政時代からソヴィエトにかけての言語政策はどの様なものであったかを述べた論文である。二言語併用のプロセスにおいて、ラテン文字化をしたことがソヴィエト領内の諸民族の識字教育のスタートだったと彼は述べている。

豊田国夫の『言語政策の研究』［豊田国夫（1968）］においてラテン文字化運動は「無文字民族の指導」の項で現れるが、やはり教育の一環として現れ、「1930 年代から、それまでラテン文字書体を基礎にしていた多数のソ連邦諸民族の文字は、ロシア文字に書き代えられ、・・」と何故ラテン文字に代えられたのかの言及もない。

また、本研究の中心となるモンゴル諸語の個別の問題に関しては以下のような文献がある。

モンゴルの文字史全体を見渡せる文献としてあげられるのはシャグダルスレンの『モン

ゴル文字学』［Шагдарсүрэн（1981）］『モンゴル文化概説』[Шагдарсүрэн(1992)]『モンゴル人の文字概説』[Шагдарсүрэн(2001)]、内モンゴルで出版されたボラクの『モンゴル文字史』[Bulag(1983)]、ボーシャンの『モンゴル文字の知識』［Boshiang(1984)］やその他『中央アジア遊牧民の文字概説Ⅰ』[Төв азийн(2001)]などが挙げられる。

社会主義時代の著作である『モンゴル文字学』、『モンゴル文字史』に関しては、古代から現在に関しての検討が中心で、ラテン文字化に関しての言及はない。『中央アジア遊牧民の文字概説Ⅰ』にもラテン文字、キリル文字に関する項はないが、これは一巻目であり現代の文字改革に関しての項は後に出版されることとなる二巻目に収録されることになるのかもしれない。また、『モンゴル文化概説』でのラテン文字化、キリル文字化に関する言及は数ページのみである。それに対し『モンゴル人の文字解説』ではラテン文字、キリル文字ともにそれぞれ一項ずつ設けられ、詳細に検討されている。とはいえ、ラテン文字政策やキリル文字化政策に関しては、公刊されている二つの公文書集（『モンゴル人民革命党が大衆に文字を教えたこと』[Монгол(1967)]『革命民主化期の学校（1921-1940）』[Хувьсгалын(1967)]以外の資料、特にモスクワでの会議などの言語学会議の議事録は使われておらず、決定のプロセスを問うものというよりは結果としてできたものがどうであったかを解説しているのみにとどまっている。

ブリヤートにおいて今までこの分野を扱った研究で最初にあげなければならないのはモントゴメリーの『ブリヤートの言語政策』[Montgomery(1994)]である。この著作においては1928 年までのブリヤートにおける言語政策を扱ったものである。特に二月革命と十月革命の時期におけるブリヤート語に関する政策の動向や、土着化政策などの動きは、彼の論文以上に詳しいものは見あたらず、ほとんど、現在のところ、この時期についての言及は彼の論文の引用になってしまうことは避けられない。弱点を挙げれば、統計的な資料が少なく、事実の羅列に終わっていることと、革命期には教育と行政の土着化が進められたのと同時に識字教育もこの時期重要な政策であったのにも関わらず、全く言及されていないことである。また、ブリヤートでは 1822 年に一定の自治が認められ、行政の記録文書が民族語で書かれていたと述べているのにも関わらず、その一方で、それらの自治を認められた西側のブリヤートでは、文字が無かったと書かれている矛盾が解決されていないこともこの論文の欠点と言うことができるだろう。

また、論文として一番早いものとして挙げられるのは、セレンゲ方言からホリ方言への標準方言の変更を決定した 1936 年の言語学会議でのダンピロンの報告『ブリヤート・モンゴル語言語建設決算報告』［Дампилон（1936）］である。この報告ではブリヤートにおける言語建設の概説と、それに対するその当時の評価が述べられている。

ラテン文字化決定まで経緯に関してはポッペの『ブリヤート・モンゴル語学』［Поппе(1933)］ラテン文字化案の表付きで解説されている。また、この作品にはワギンダラ文字に関しても検討がなされている。

シャグダロフの『ソヴィエト期のブリヤート文語の統一規範の確立』[Шагдаров(1967)]はその名の通り、ソヴィエト期のブリヤート語の文章語の確立に至るまでの変遷を文字と音

声、正書法、正音法、形態論、統語論、語彙、方言と文章語などに分けて検討した作品であり、モンゴル文字からラテン文字へ、ラテン文字からラテン文字へ変化したことによってブリヤート語の正書法にどの様な変化が生じたかが検討されている。

またツェデンダンバーエフの「ブリヤートにおける言語建設の総括と焦眉の問題」[Цыдендамбаев(1973)]は 1926 年から 1973 年当時に至るまでのブリヤート語政策の流れが検討されている。この論文はその当時からすでに問題となってきていたブリヤート語話者の減少の問題を目的に書かれたようである。

また、田中克彦氏の『言語の思想』[田中克彦(1975)]もブリヤートに関して言及された文献として挙げねばならない。当時の制限された資料の中からソヴィエトやブリヤートの言語的な思想や活動などを追っていたため、出版当時においてはイデオロギー的に批判され、現在においては資料不足が批判されているが、多くの研究者において、彼の作ったソヴィエト言語政策の評価の枠組みは崩れていない。筆者の作品では、特にソヴィエトとブリヤートの関係や、ブリヤートの民族運動と分かち難く結びついていたモンゴルとブリヤートとの思想的な連帯意識に関する言及など、多くののことをこの作品に負っている。25 年以上も前に出された本であるが、いまだにその価値は減じていない。

カルムイクに関する言語史関係の研究で一番大きなものはノミンハーノフの『カルムイク文字史概説』[Номинханов Ц.-Д. (1976)]である。この論文では第一部が、1648 年よりオイラト系の人々によって使われ続けたトド文字に関して述べてあり、第二部が 1924 年以降のキリル文字とラテン文字化がどう決まり、どのような文字体系と正書法が使われたかに関する研究が、公文書館の資料などを使ってなされていて、非常に有益である。しかし、1938 年以降のキリル文字化に関する言及はない。この本の出版年は 1976 年であり、すでに十分資料はあったと思われるが、書かれなかったのである。また、実際に彼が使った公文書を読んでみると、彼があえていわなかったこと、あるいはいえなかったと推測できる事柄を見つけることができる。

また、この他、カルムイクでのこの分野に関して多くの研究を残しているのは A. H. パヴロフである。彼の残した研究として、特に文字改革関係については「V・L・コトヴィッチと旧カルムイク文字の改革」[Павлов(1975)]、「現代カルムイク文字発展の基礎的段階」[Павлов(1976)]、「何故我々はこう書くのか」[Павлов(1980)]、「カルムイク文章語の形成と発展」[Павлов(1987a)]、「カルムイク文章語の統一規範の確立と発展」[Павлов (1987b)]が挙げられる。ノミンハーノフの本と違い、様々な時期に様々な論文集の中で発表されたため、重複する部分もあるが、言語・文字改革のプロセスに関してはノミンハーノフよりも詳しく書かれている。ただし、1938 年以降のキリル文字アルファベット、あるいは正書法の制定に彼は深く関わっており、以上に列記した論文の論調には、その当時のアルファベットあるいは正書法を擁護するようなものが感じられる。よって、読んでいく際には、その分を割り引かなければならない。また、彼もノミンハーノフ同様、多くの公文書を使っているが、やはり、時代的な制約があってか、引用されなかった部分がある。

なお、この序章で取り上げたモスクワでの「モンゴル諸族文字・言語問題会議」に関して詳しく検討した研究はない。辛うじてノミンハーノフ（『カルムイク文字史概説』）と田中克彦（『言語の思想』）が言及しているのみである。しかし、ノミンハーノフにしても『革命と東方の文字』に載った会議に関する記事を参照しているのみにすぎない。

以上、ソヴィエト全体とモンゴル諸語の各言語に関する言語改革、文字改革を扱う先行研究となるような論文をあげた。社会主義時代には肯定的な評価しかできなかったものに関しては、今後新しく再検討が必要なものもある。そして、繰り返しになるがモンゴル諸族でおこなわれたこの時期の言語・文字政策に関してその相関関係を研究した論文は未だないのである。

このような先行研究をふまえて 1920-1940 年代のモンゴル語、ブリヤート語、カルムイク語の言語政策史を検討してゆきたいと思う。

本論文の構成

本論文は六章立てである。

第一章の「ソヴィエトにおける言語政策」においては、1920 年代から 40 年代にかけて行われたソヴィエト全体をラテン文字化期、キリル文字化期に分けて言語政策を概観し、「国際」的な語彙に関する問題と合わせて、同時期にモンゴル諸族において文字改革の行われる背景となる諸条件を検討する。

第二章の「モンゴル諸族の文字使用の歴史」ではモンゴル文字からラテン文字をへてキリル文字に至るまでモンゴル諸族で採用された文字の移り変わりを見てゆく。

以上の二章で、ソヴィエト全体のこの時代の流れ、モンゴル自体の文字使用の歴史という二つの背景を検討し、次に諸地域での実際の言語政策について検討に入る。

第三章の「ブリヤートのおける言語政策」では、ブリヤート人たちの 20 世紀初めから 1940 年代に至までの言語改革や言語政策の動きを考察する。

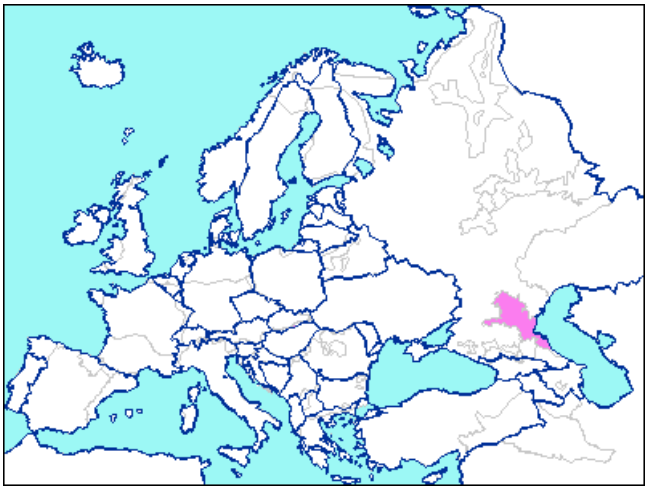
続く第四章の「カルムイクにおける言語政策」ではカルムイク、第五章の「モンゴルにおける言語政策」ではモンゴルで行われた 1920 年代から 1940 年代にかけての言語政策を考察する。

第六章の「ウラジーミルツォフの夢と現実」では、ロシア帝政末期からソヴィエト時代初期にかけて活躍したモンゴル学の大家ウラジーミルツォフがロシア革命、モンゴル革命によりモンゴル諸族の文語と口語が乖離している状態、つまりダイグロシア状態が崩れてゆくのを観察し将来どうなっていくと考えたのかを、彼の文献やスピーチをもとに探り、彼が考えたようにはならなかった現実をまとめとして行う三地域の考察への問題提起としたい。

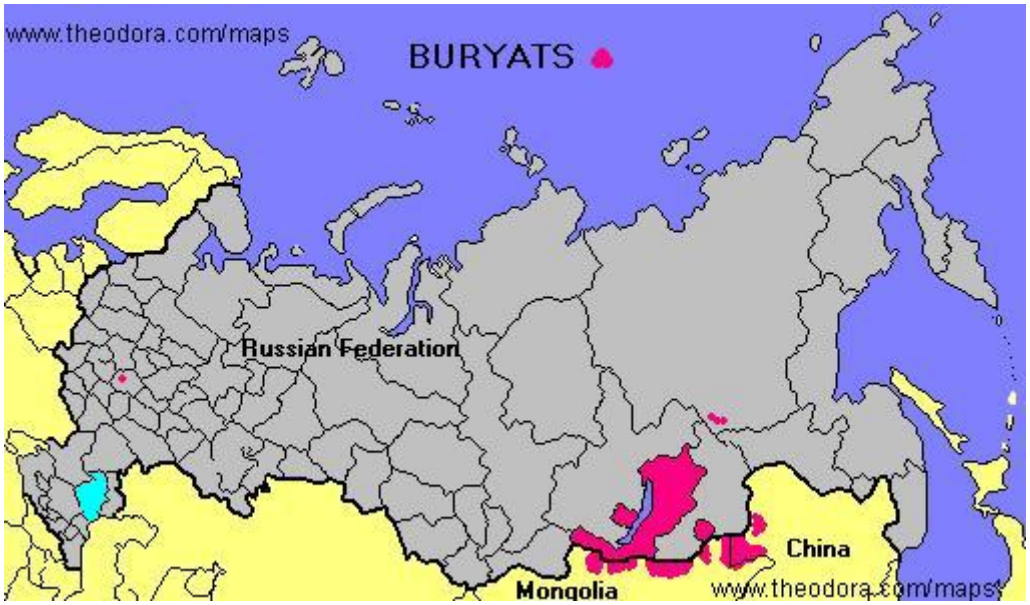
最後にまとめとして「言語」の統合と分離という問題設定に応える形で以上の事柄をまとめてみたい。

それではまず、第一章では、ソヴィエト全体の言語政策を簡単にまとめ、全体的な背景を確認していくことにしたい。

モンゴル国



ヨーロッパ地図の中のカルムィク共和国



カルムィク共和国(水色)とブリヤート人たちの居住する地域(赤)